

第一次世界大戦と歌劇

小野塚知二

クラシック音楽の基盤は第一次世界大戦で激変しました。第二次世界大戦期の日本の状況から類推すると、総力戦だから音楽などに現^{うつ}を抜かしている余裕はなかったと考えたくなるのですが、ことはそれほど単純ではなかったようです。クラシック音楽全般を論ずるのは大きすぎるテーマなので、ここではもともと多くの資源を投入しなければ成り立たない総合舞台芸術、殊に歌劇を取り上げてみましょう。

一九世紀後半の歌劇を代表する作曲家たちのほとんどは一九世紀のうちに没しています。ヴェルディ (1813-1901)、マスネ (1842-1912)、リムスキー＝コルサコフ (1844-1908)、そしてアルベニス (1860-1909) は二〇世紀まで生き延びましたが、第一次世界大戦を見ることはありませんでした。歌劇指揮者としても活躍したマラーは一九一一年没です。サン＝サーンス (1835-1921) は長命でしたが、歌劇、バレエ、交響曲、協奏曲などの大作は大戦前のものです。

協商国のうちフランスとロシアではおもだった歌劇作曲家

は第一次世界大戦前に没しており、その後を継ぐ者がほとんど登場しませんでした。つまり、第一次世界大戦が歌劇史の自然な断絶面になっているのですが、同盟国では事情が少し異なります。ドイツ帝国とオーストリア＝ハンガリー帝国には、ヴェーン、ブダペシュト、プラハ、ザグレブ、ドレスデン、ベルリン、ミュンヘンなど大歌劇場があり、一九世紀後半から二〇世紀前半にかけて多くの歌劇作曲家が活躍し、しかも歌劇場は戦時にも上演を続けていました。

イスタンブルの薔薇

戦前・戦中・戦後を通じてヴェーンとベルリンで喜歌劇作曲家として活躍したファル (Leo Fall, 1873-1925) の戦中の代表作『イスタンブルの薔薇 (Die Rose von Stambul)』(一九一六年初演) の冒頭を見ましょう (譜例1、管弦楽総譜は大きすぎるのでコレペイトウア用)。嬰へ短調の威勢のよい行進曲で幕開きです。オスマン帝国の軍楽 (メフテ



譜例1 ファル『イスタンブルの薔薇』第1曲導入部

ル) 風のリズム、第六音を半音上げてレ#にしているところ、そして第九小節以降のホルンの合いの手、それに派手な銅鑼など、ヴェーンの聴衆がトルコ風と受け止める要素が満載で、いわゆる「トルコ行進曲」の伝統の掉尾を飾るものです。

この喜歌劇が書かれるようになった背景には、おそらく、

かのチャーチルが関わっています。オスマン帝国は第一次世界大戦の開戦後も慎重に全方位の中立政策を採ります。日本が大慌てで参戦したのと対照的でした。英国ヴィッカーズ社ではオスマン帝国向け超下級戦艦レシヤディエが竣工目前でしたが海軍大臣チャーチルの先走った命令で同艦を差し押さえて、英国海軍戦艦エリンに改名します。これがオスマン帝国を刺激して、次第に同盟国側に傾かせて、遂に一月には英仏露と戦争状態に入ります。オスマン帝国を同盟国側に押し遣ってしまった失点を挽回するため、チャーチルはオスマン帝国に打撃を与えるガリポリ上陸作戦(ダーダネルス戦役)を立案したのですが、戦艦五隻を沈められ、オーストラリア軍・ニュージーランド軍 (ANZAC) を中核とした上陸部隊も撤退を余儀なくされます。この失敗がアスキス首相辞任の原因となり、チャーチルはブルガリアの同盟国側参戦を招く結果しかもたらさず、政界中枢から遠ざけられます。他方、独逸側では、意外に善戦したオスマン帝国の評価が上がります。ことに上陸軍を獅子奮迅の戦いで退けたムスタファ・ケマルの英雄視はここに始まり、トルコ革命に引き継がれます。ファルはガリポリ勝利の頃からこの喜歌劇を書き始め、同年末のヴェーンでの初演に間に合わせます。歌劇ではほかにモレハール、カールマーン、そして神童コルンゴルトが戦時にも新作で同盟国の諸劇場を賑わせました。ツヴァイクが「昨日の世界 (Die Welt von Gestern)」と呼んだものは、ここで



譜例2 R. シュトラウス『影のない女』第1幕第1場冒頭

はまだ命脈を保っていたのです。

影のない女

リヒャルト・シュトラウス（1864-1949）も戦前・戦中・戦後を通じて活躍しました。戦中を通じて書き続けられ、敗戦から一年も経ずにヴィーンで初演された『影のない女（Die Frau ohne Schatten）』は『イスタンブルの薔薇』よりも深刻に、戦争の影響を受けています。とても長く長大な作品

トラウスは職人的な技を誇る作曲家で、一九世紀後半までの技法（昨日の世界）で新しさ（今日）を感じさせています。R・シュトラウスのそれ以前の歌劇の多くは古典の翻案（オペラ、エレクトラ、ナクソス島のアリアドネ）か、モーツァルト『フィガロの結婚』の大幅な翻案（薔薇の騎士）だったのですが、この作品は劇作家フーゴ・フォン・ホフマンスタールとの遣り取りを経て創作された寓意的で難解な物語です。とはいえ、この歌劇は最終的に第三幕の最後で収まるべきところに収まる物語で、「昨日の世界」の約束事を守っています。

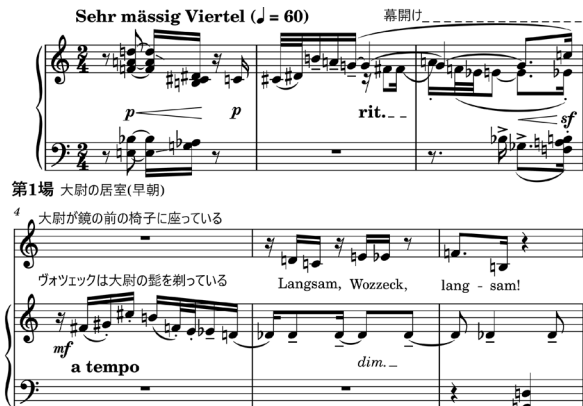
ヴォツェック

ベルク（Alban Berg, 1885-1935）が戦中から戦後にかけて書き続けた『ヴォツェック（Wozzeck）』は一九二五年にベリンで初演されます。わずか三小節の序奏の後、すぐに第一場が始まります（譜例3）。十二音技法の音楽ですが、第一場の冒頭ではどこかで聴いたような旋律が一瞬耳をかすめます。ペーターヴェン交響曲第六番「田園」の第一楽章「田舎に到着したときの愉快な気分」の第一主題とよく似た音型です。この歌劇では随所で、一九世紀から第一次世界大戦前のヴィーン（またドイツ語圏）の作品（シューマン、マーラー、R・シュトラウス等々）から断片的な引用がなされており、その断片を変形させながら繰り返すことで音楽が進行します。気付かれていないだけで、大戦前の多様な音楽が引

ですが、冒頭の六小節（譜例2）だけでも、ただならざる不穏と不安に、逃れえぬ悪しき運命が重くのしかかってくるのを感じることが出来ます。冒頭にテノールテューバ（F管、ホルン奏者が演奏）二本とバステューバで三回奏される下降音型に、砲撃を連想するのは無理とはいえません。また、随所に表れる鷹の鳴き声は警戒のサイレンを思わせます。シユ

用されている可能性があります。ほとんど無調の音楽ですが、しばしば何かが耳に残るのは引用と音型展開の効果です。

ベルクは大戦開戦直前にヴィーンで上演されたゲオルク・ビュヒナー原作の演劇『ヴォイツェック（Woyzeck）』を観て、その歌劇化に心を奪われます。大戦に徴兵され、一九一七年に除隊してから、苦労を重ねて作曲を続け、それまでのクラシック音楽の形式と様式を集大成した作品に仕上げます。



譜例3 ベルク『ヴォイツェック』第1幕冒頭

理髪師出身の下層兵士ヴォツェックは大尉の当番兵として雑用をこなしながら、愛人のマリイとの間に子どももいます。マリイが鼓手長と浮気をしたことから、ヴォツェックの精神は徐々に蝕まれ、最後はマリイを殺し、自分も沼に溺れて死にます。まことに救いようのない物語

の冒頭に、愉快でのかな「田園」を思わせる一節を配置したのは象徴的です。

第一次世界大戦は、それを経験してしまった人びとの世界観や人間性や感性に不可逆的な変化をもたらしました。『イスタンブルの薔薇』は、「昨日の世界」に留まった気楽な作品です。『影のない女』は音響的には戦争の影が濃く落ちています。話の筋にはまだ何らかの救いがある、聴衆はそれに身を委ねることが出来ます。『ヴォツェック』はシュトラウスとは正反対で、「昨日の世界」の音楽をたくさん引用するのだけど、物語は陰惨で、観終わって心の落ち着けどころのない、救いのなさです。しかし、こうした救いのないオペラがその後、シヨスタコーヴィチ『ムツェンスク郡のマクベス夫人』やブリテン『ピーター・グライムズ』によって継承され、むしろ第一次世界大戦後の歌劇の主たる系譜になってしまったような観すらあります。歌劇は金が掛かりすぎるだけでなく、救いの喪失という点で大きく変わってしまいました。

相対的に戦争からは遠いところで大戦期を生きたブッチーニの大戦中の三部作のうち、たとえば『ジャンニ・スキッキ』（一九一八年ニューヨーク初演）は、音楽は耳に心地よく美しいのですが、遺言状（『昨日の世界』）改竄をめぐる黒い笑いが不気味に大戦経験を反映しています。

おのづか・ともじ

東京大学特任教授／名誉教授